

会 議 録

名 称	令和6年度 第1回 登米市部活動地域移行準備委員会
開催日時	令和6年6月24日（月） 午後2時 開会 午後3時46分 閉会
開催場所	中田庁舎 101会議室
出席者	○ 登米市小学校長会代表（米山中校長） 佐藤 智哉 ○ 登米市小学校長会代表（津山中校長） 森 美紀子 ○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長） ○ 登米市中学校体育連盟理事長（中田中教諭） 熊谷 篤 ○ 特定非営利活動法人登米市体育協会 会長 関 壮一（副会長） ○ 登米市スポーツ少年団本部 本部長 木村 健喜 ○ 登米市総合型地域スポーツクラブ連絡協議会 会長 佐々木 悦郎 ○ 登米ジュニア吹奏楽団 団長 只野 正昭 ○ 元中学校美術教諭 主任児童委員 及川 英之 ○ 登米市PTA連合会 副会長 菅原 かおり
事務局等職員 職・氏名	○ 登米市教育委員会 教育長 小野寺 文晃 次長兼学校教育管理監 鹿野 征美 学校教育課長 猪股 勝徳 生涯学習課長 守屋 乃扶子 生涯学習課課長補佐 佐藤 慎 生涯学習課 主幹 高橋 美香 活き生き学校支援室長 林 宏也 活き生き学校支援室係長 及川 知美
会議内容	1 開会 2 委嘱状交付 3 開会の挨拶 登米市教育委員会 教育長 小野寺 文晃 ・ 部活動の地域移行については、国の担当者から直接話を聞く機会があり、地域移行の主役である子供たちの姿が見えず、大人の都合と感ずる部分が多かった。最初は、令和7年度から完全実施するという内容であったが、徐々にトーンダウンしている。 ・ 地域の実情を総合的に判断した上で、それぞれの地域に合った移行の仕方が進められていくというのが望ましい。 ・ 昨年度は、部活動地域移行等検討委員会を開催し、各スポーツ団体や文化・芸術団体の皆様方から多くのご意見をいただいた。その中で、教育委員会の方針を示すべきであるというご指摘もあり重要なことであると認識していたが、委員の皆様から様々な意見を出していただき、それを拝聴した形でどう進めていくかということを決断していくこととした。 ・ 今年の中学校総合体育大会では、軟式野球で合同チームが三つあった。私が現役の頃は考えられないことであるが、現状では、児童生徒の減少により合同チームが当たり前となってきた。これはスポーツに限らず、文化・芸術団体についてもそうである。吹奏楽部の大編成を組むことができなかつたり、部自体の存続も危ぶまれたりしている。 ・ 大事なことは、子供たちが少なくなった現状の中で子供たちの活動の機会をどのように確保するのかを検討していかなければならないと思っている。その具現化のために、四つの視点が大切であると考えている。 ・ 一つ目は、部活動地域移行は何のために行われるのか。 ・ 二つ目は、指導者に対する報酬や謝金、あるいは、様々な活動をする際の送迎等の保護者負担。

- ・ 三つ目に顧問と指導者との関係性、あるいはその立ち位置、そういったものをどのようにして整備をするのか。
- ・ 四つ目は、平日の部活動地域移行はどのように進めるのか。私は現状ではできない、すべきでないと考えている。ただ、社会の情勢等が変わってくれば、その可能性が出てくるかもしれないが現時点では無理である
- ・ まずは、土日祝日の活動をどのように展開していくかである。私の具体的なイメージは合同練習である。35年前に部活動の指導をしていた際に、月に1回程度であったが、米山中学校のグラウンドに集まり陸上の合同練習を実施した。長距離やハードルなど、各種目のスペシャリストの指導者が携わったことで、その場だけではなく各校の戻ってからもその練習方法が生かされ登米市全体の記録が伸び、全国大会で活躍する子供たちも増加した。
- ・ 吹奏楽や美術などの芸術の分野についても同様であり、既に多くの実践をされているジュニア吹奏楽団のように、大人と一緒に行う演奏会を実施するなど、年々レベルが上がっている。また、高校絵画展への参加等も素晴らしいことであると考え。休日に子供たちが集まり切磋琢磨し、様々なことを共有できるとよい。
- ・ バスケットボールであれば、BJ リーグの会場にもなっている蔵ジウム、卓球であれば国体の会場である中田アリーナなど、利便性のある施設に登米市の子供たちが一堂に集まり、活動することも考えられる。
- ・ 一方、去年の部活動等地域移行検討委員会の話し合いの中でも話題になったが、部活動の顧問と地域の指導者の思いが重なることや、勝利至上主義に偏ることなく楽しく活動していくことが必要である。
- ・ 中体連では、全国大会6種目を開催しないこととなった。中体連という組織自体も大きな分岐点にきている。どんな地域であろうと同じ方向を見て、子供たちのためにやれることを確実に進めていかななくてはならない時代となってきた。何が子供たちにとってベストなのかについては、各地域の子供たちや保護者の実情が大きく違うので地域ごとに違いがあってよい。
- ・ 私が参考に行っている実践は「会津若松方式」である。教育雑誌「内外教育」の中でその実践が紹介されていたが、子供の活動機会を奪わない部活動の地域移行の考え方が紹介されていて、非常に参考になった。機会があれば、実際に見に行くことも検討している。
- ・ そのような先進的な実践などを踏まえながら、委員の皆様方と登米市の子供たちの未来のためになる一定の方向性を示すことができればと考えている。ぜひ、お力を貸していただきたい。

4 自己紹介

5 委員長及び副委員長の選出

6 委員長挨拶

7 報告・説明

(1) 登米市部活動地域移行準備委員会設置要綱について

(2) 令和6年度県の部活動地域移行の取組について

(3) 令和5年度 部活動地域移行等検討委員会まとめ

(4) アンケート結果について

(5) 登米市部活動地域移行リーフレット（案）について

(6) 今後のスケジュール（案）について

8 協議

(1) 資料及び活動に関する意見交換

○ 登米市総合型地域スポーツクラブ連絡協議会長 佐々木 悦郎

- ・ 中学校における部員数やその割合について確認をしたい。

(事務局)

⇒ 登米市の生徒数は、1794人中1400人の78%が運動部員であり、それ以外が文化部員となる。

○ 登米市スポーツ少年団本部 本部長 木村 健喜

- ・ ロードマップの下段部分に検討事項があるが、部活動については強制ではないと認識しているが、登米市は教育の一環という捉え方で全員入部制とするのか。私は、全員入部制でやってほしいと考えている。

○ 登米市小学校長会代表（米山中校長）佐藤 智哉

- ・ 中学校の方では今、ほとんどの学校で全員入部制という形を取っているが、所属はしているけれどもなかなか参加できないという実態もある。校長会としては部活動の地域移行の方向性がはっきりするまで、原則部活動全員入部制で考えている。ただ、世の中の動きに合わせてそういった部分を検討していく必要がある。

○ 登米市スポーツ少年団本部 本部長 木村 健喜

- ・ 今後、休日の移行となった際は、平日の5日間は学校の活動として存在するわけですから、その期間は全員加入でもよいが、平日を含め移行となった際には難しいと思われる。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長）富士原 昭裕（会長）

- ・ 付け加えとして全員加入と書くと、いかにも強制という捉えになるが学校や個人によっても違うので、その事情に応じて所属はしているけれども学校外での活動を優先させたり、その他の諸事情で活動に参加していないという子供もいたりするので、「個に応じた」というところが付け加えられる。

○ 教育長 小野寺 文晃

- ・ 先ほど紹介した会津若松市は、部活動の全員加入制を推進するとのことである。その理由として、参加することで学ぶことや人間関係づくりの高まりがある。やりたい子供だけやればよいという取り組みには弊害もあり、例えば、時間がある分ゲームや SNS 等に流れてしまう可能性がある。これから先、社会がどう変わるかによるが現時点で会津若松市は、全員加入制を堅持するとのことである。一方で部活動の全員加入をしないという流れもあるので、今後、地域の実態に応じて検討していく必要もある。

○ 登米市総合型地域スポーツクラブ連絡協議会長 佐々木 悦郎

- ・ 現在生徒数が少なくなっており、合同で取り組んでいる活動があるが、より生徒数が減少していった際の対応を市はどのように考えているのか。

(事務局)

⇒ 今後の先行実施にも関わってくるが、昨年度の検討委員会の話し合いの中で、サッカー協会の代表の方から人数の減少から合同練習を実施しているという内容であった。今後、生徒数が減っていく際には、合同で練習する場の設定や人数の調整、指導者の調整など様々な対応が必要となってくる。どこが担当となるかは決まっていないが、調整役が必要であると考え。

○ 登米市中学校体育連盟理事長（中田中教諭） 熊谷 篤

- ・ 今年度の中総体では、まず野球が3チーム合同であった。それからソフトボール、バレーボール、バスケットボールが1チームということで、その年になってみないと分からないという現状である。今後、新人大会が実施されるが、チーム数がどれぐらいなのか調査し、まとめていきたい。現状として生徒数が大分減ってきており合同チームが増えていくことが予想される。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ 現在、新人大会に向けて合同チームの話を中学校の校長先生方としているが、この秋に行われる新人大会に向けては、これまでにないほどの合同チームが編成される予定である。それだけ生徒数も減っており、団体スポーツを選ばない子供たちもいるということで、中体連における合同チームの規定では、新人大会から年度が変わって翌年の夏の全国大会までが1つのサイクルとなっている。しかし、秋に合同チームであっても、翌年に1年生がたくさん入部すれば4月に解消されることもある。

○ 登米ジュニア吹奏楽団 団長 只野 正昭

- ・ 昨年度の検討委員会から話し合いに参加し、資料やパンフレットを見ると、ジュニア吹奏楽団では、「もうやっている」と言える内容である。ジュニア吹奏楽団は8年目となり、このパンフレット（案）にある、「もっと上手になりたい」や「専門的な指導を受けたい」、「他の学校の人たちとコミュニケーションを図りたい」などの子供たちの声があるのであれば、「じゃあ何とかして解決してみようじゃないか」ということで始まった。立ち上げ当時は、46人の子供たちが入部していた。その子供たちの意識はすごく高く、どちらかというと登米市の吹奏楽団の代表という意識を持って集まってきたように感じられ、ジュニア吹奏楽団で学んだことを各学校に持ち帰り、その技術を広める立場であった。このジュニア吹奏楽団を指導するためには、当然専門的な経験と知識を持った自衛隊や仙台のプロの人たちにご指導いただいたりもした。その予算の裏付けは団費であるが、楽器や練習場所の問題等々もあり、その解決策として一部の大人たちの寄付を募ることもあった。発足当時は、そのような協力をいただきながら8年目を迎えているが、コロナ禍の2年半で人数が大幅に減り、現在は小・中学生21名である。登米市だけではなく、近隣の市町村からのメンバーもあり、そういう子供たちの願いを吸い上げようということで、指導スタッフも迫吹奏楽団のメンバーを含め10人体制で行っている。金銭的な面や大人たちの指導の面では、かなりボランティア要素が強い団体であるが、今後部活動の地域移行ということで金銭面での配慮があれば、支援、援助、保障等の課題については、クリアできると考える。先行して、このジュニア吹奏楽団が部活動地域移行のモデルケースになってもいいぐらいの気構えである。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ お話を聞いていると理想の形に近い活動をされているという印象を受けた。今、お話があった指導者に対する予算的な措置というのは、何か昨年度も出ていたのか。もしくは、見通しは何かあるのか。

（事務局）

⇒ リーフレット（案）にも示したとおり、国や県から補助もないことから、現状では受益者負担の原則という方向で進めている。

- 教育長 小野寺 文晃
 - ・ ジュニア吹奏楽団における団費はいくらなのか。
- 登米ジュニア吹奏楽団 団長 只野 正昭
 - ・ 団費という形で、月に 1,000 円である。
- 教育長 小野寺 文晃
 - ・ 今お話いただいたように運営の仕方や受益者負担のありようなど、大いに参考となり、私が考えている部活動の地域移行に近い部分が多々あった。しかしながら、担当の方から説明があったとおり、国や県からの予算措置がなく、その働き掛けを教育長部会でも行っている。子供たちのための部活動の地域移行という感覚があれば予算措置もあったと考えられるが、そもそもの始まりが働き方改革であった。そのことが受益者負担の原則につながっている。少なくともよいので、まずは予算を計上して欲しい。やはり、市として単独で予算を捻出することについては難しい現状にあり、今後の大きな検討課題である。
- 元中学校美術教諭 主任児童委員 及川 英之
 - ・ 資料の方に、中学校 1・2 年生にアンケートの質問内容で「現在部活動は何に所属していますか」の回答がソフトテニスから始まり箏曲までであるが、部活動の地域移行は、この括りで実施していくのか。

(事務局)

- ⇒ 私のイメージとしては、まずは各校の実態や要望を把握した上で、指導員の検討を行う。もしかすると、現在各校に設置されている部活動の中には、土日の活動は行わないことも想定される。そのようなことも踏まえた上で指導員の方々や団体に学校の意図を伝え、活動場所や諸費用等で条件を整えながらマッチングを図っていく必要があると考えている。
- 元中学校美術教諭 主任児童委員 及川 英之
 - ・ 休日の部活動を行っている種目は何なのか現状を把握したい。また、各学校の部活の種類ごとの人数も把握したい。
- 登米市中学校体育連盟会長（中田中学校長）富士原 昭裕（会長）
 - ・ 各学校の部活の種類と人数については、事務局が後ほど資料配布を行う。土日の部活動における実施の有無については、多くの運動部は土日どちらか 1 日は実施している。また、吹奏楽部も実施している。本校で言えばパソコンや美術部は、ほとんど土日は活動していない。他の中学校も同じだと思われる。
- 元中学校美術教諭 主任児童委員 及川 英之
 - ・ 資料の中でありました「もっと上手になりたい」「専門の指導を受けたい」という要望に何かできたらいいなと考えている。例えば、毎回ではないが何かの折に、表現や鑑賞の機会を設けることができなかと考えている。
- 登米市 PTA 連合会 副会長 菅原 かおり
 - ・ 保護者の 1 人として何とも言えないところもある。まず、最初にこの部活動の地域移行という話を聞いて「どうなのかな」と思った。子供たちが、中学校での部活動やスポーツ少年団の練習を行う際に指導者が変わる。先生とコーチの連携が図られていればよいが、そうではなかった現状も体験をきている。また、コーチを探したいが、なり手がいないという時期もあった。部活動の地域移行を実施したことによって、そのような問題がなくなればよい。さら

に、入りたい部活がなくて、しょうがなく入部している子供たちもいた。部活動の地域移行は希望となるので、上手になりたい人たちにとってはよい。野球部での経験であるが、登米市の選抜チームを組んで練習や大会に参加した。何年か所属したことによって、自校のチーム内だけではなく、多くの部員と切磋琢磨することで違う世界が見え、自分のレベルや技術がどれぐらいかということが分かり、とても成長したという経緯も見ている。地域住民の方やスポ少関係、親の代表等、一生懸命取り組まれている方々からも意見をいただけるとありがたい。

○ 特定非営利活動法人登米市体育協会 会長 関 壮一（副会長）

- ・ 各学校の中で、外部指導者は何人ぐらいいるのか。

○ 登米市中学校体育連盟理事長（中田中教諭） 熊谷 篤

- ・ 男子部が57人。女子部が29名、男子女子部どちらも共通で携わっている方が21人おり、計107人の外部指導者がいます。

○ 登米市スポーツ少年団本部 本部長 木村 健喜

- ・ 部活動の地域移行という名称で今話してるが、だんだん文科省でもトーンダウンしてきて、やりたい人がやりたい種目という流れに変わってきた。それは、部活動の地域移行ではないと私は考えている。例えば部活動をそのまま土日の活動とした上でスタートしていくのか。それとも、文部科学省が言ってるような、土日の活動については、やりたい人がやりたい種目をやればいいのかということを、登米市においてもその捉えを整理する必要がある。

○ 教育長 小野寺 文晃

- ・ 木村委員のお話を聞いてると、部活の延長上に休日の部活動の地域移行があると捉えたが、私が理想として考えているのは、「登米市として1つの括りで子供たちの活動の場を確保し面倒を見る」そのようなシステムづくりを目指していきたい。いずれ子供たちの数は少なくなるので、部活指導者やスポーツ少年団で指導していただいている方がそのまま継続することになったとしても、学校だけの単位では存続が不可能な場合もあるので、そのことも踏まえて考えると、私は只野委員が活動しているような興味を持っている子供たちが集まり活動し、そのスキルを自校に生かすという、双方向のつながりが大切であると考える。その際に問題になるのは、その各指導者の立ち位置、考え方や指導の仕方等々、保護者も含め目的意識をしっかりと持って連携していく必要がある。実際にある中学校では、陸上部に入部し平日は学校で部活動として活動しているが、週末は、サッカーやラグビーに取り組む生徒がいた。それが、良いとか悪いとかではなく、いずれ社会体育という視点からそのような選択が多くなっていくことも想定される。外部指導者が100人を超える数ではあるが、その方々のほとんどは仕事が終わった後に携わっていただいております、子供たちや部活動の顧問との交流は難しい状況である。交流するためには、早めに仕事終わって指導していただくか、あるいは子供たちが長時間の活動を強いられるかである。私が現場で感じたのは、子供たちの思いだけではなく親御さんの勝たせたい、何とかしたいという思いが上回ってしまい夜8時や9時まで活動することで、怪我をしたり燃え尽き症候群になってしまったりというケースもあるので、やはりその辺をこの部活動の地域移行で方向性を示し、整理統合して行く必要がある。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ この部活動地域移行準備委員会の根幹になる。部活動の地域移行というネーミングから様々なイメージが出てくるので、その辺の文言の整理についても、リーフレットに盛り込んで周知徹底を図っていきたい。また、登米市としては、平日の部活動がそのまま地域に移行するというよりは、野球部の生徒が吹奏楽部に入って活動するということも想定しているという話であった。さらに、先ほど話題となった地域クラブ活動の指導員と学校の部活動担当教員とのコミュニケーション不足から、子供たちによりよい指導ができない場面もあったところでは、今も各校で改善に取り組んでいる。いろいろと質問や疑問点、提案等も出てきたが、9月にはパンフレットを配布して、部活動の地域移行について皆さんにお知らせするという案も出ている。リーフレット等について何かご意見等はないか。

○ 登米市 PTA 連合会 副会長 菅原 かおり

- ・ 先日、PTA 連合会の理事会に来ていただき説明をしていただいた際に、リーフレットの中の「ニーズに答える」の「答える」がちがうのではという話題になった。

（事務局）

⇒ 「応える」に訂正する。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ リーフレットの周知する範囲はどこまでなのか。

（事務局）

⇒ リーフレットは、学校や保護者の皆さん、各スポーツ団体にも配布する。また、ホームページに掲載して周知することも検討している。尚、現在は紙以外でもデータ等での周知方法もあるので、各校の現状等に応じて対応したい。リーフレットの内容については、今後、ご意見をいただいたことや本日の話し合いでのご意見等を踏まえ、修正したものを8月の部活動地域移行準備委員会で再度提案したい。

○ 登米市総合型地域スポーツクラブ連絡協議会長 佐々木 悦郎

- ・ リーフレットの方に「令和7年度から準備の整った種目について土日の部活動の地域移行を進めます」と記されているが、「準備の整った」とはどういうことか。

（事務局）

⇒ 地域指導者や活動内容等が明確になった種目から休日に指導に当たるということになる。その際には、保護者、地域指導者、学校の連携が必要となる。今後、ガイドラインや活動計画書の作成等を示した上で進めて行きたい。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ 事務局から示された生徒数の推移プリントについて説明などはあるか。

（事務局）

⇒ 先ほど教育長から人口減少について話があったが、今年度1798人の生徒数が13年度の令和18年度には、740人の減となり約1000人前後まで減少する。登米市としてはこの辺が大きな課題となる。部活動の存続を考えた際に生徒数の大幅な減少について考慮してほしいという思いで最新の情報を

お示しした。

○ 登米市中学校体育連盟会長（中田中校長） 富士原 昭裕（会長）

- ・ 各中学校においてもかつてあった部活動が、今はもう部員数が減少し、なくなっている。そのような活動の受け皿の1つとしてやりたい種目をその地域で担っていければ、子供たちのためにもなると考える。それでは、2の「その他」ですが事務局から何かあるか。

（事務局）

⇒ 「中学校部活動の地域移行に係る指導者アンケートに（案）」についての説明。本アンケートはスポーツの指導者のアンケートであり、文化・芸術については別途相談をしていきたい。現在の活動の状況や中学校で指導している指導者への質問となっている。裏面には、小学生への指導者への質問や実際にどのように協力をいただいているのかについて調査するものである。7月の夏休み前に調査を実施したいと考えている。アンケート内容でお気づきの点があれば、お話いただきたい。

○ 登米市スポーツ少年団本部 本部長 木村 健喜

- ・ アンケートを実施しまとめるのはよいが、個人がその部活動の指導者になることはよくないのではないか。要するに1人で指導して方向性が決まってしまうと、変な方向に向いてしまうことも考えられる。そうならないように複数の組織、あるいはスポーツクラブ等がコーディネートしながら活動するのがよいのではないか。個人による指導者としての参加は持続可能な組織にならず、一過性のものになってしまうことを心配してる。そのような意味でアンケートは良いとしても、組織へのアンケートを検討していただきたい。

（事務局）

⇒ 今回のアンケートはあくまでも受け皿となる指導者の方の現在の考えや部活動の地域移行の理解度等を確認したいという意味で調査を行っていく。木村委員の発言のとおり個人で受けるのではなく、組織で対応していただくものと捉えている。今回は個人へのアンケートであるが、後日、スポーツ少年団やスポーツクラブ、体育協会等の団体へのアンケートも検討していきたい。結果については、集計が間に合えば、8月の準備委員会で示したい。

○ 登米市総合型地域スポーツクラブ連絡協議会長 佐々木 悦郎

- ・ 学校と地域指導者の橋渡しをするコーディネーターは考えているのか。

（事務局）

⇒ コーディネーターについては今後検討し、できれば配置したい。

6 閉会の挨拶 副会長

7 閉会